会報
青森県政を考える会

2025.12.1 第115号

編集　青森県政を考える会事務局　　〒036-8162　青森県弘前市安原
発行　　TEL 070-6952-2614　　3-3-11　竹浪気付
FAX 0172-88-6656

速報：22日に県・県教育委に高校入学時の負担軽減を求める要望書を提出します！

【要望事項】

１．授業料以外の初年度費用の縮減に向けた政策方針の策定

生徒1人あたり平均23万円の初年度負担は、県内家庭にとって決して軽いものではなく、進学の自由を狭める結果につながっています。

国際人権規約A規約13条が求める「中等教育の漸進的無償化」を踏まえ、授業料以外の費用についても段階的に縮減するロードマップを明示することを求めます。

２．教科書・副教材費および生徒指導関連経費の公的補助制度の拡充

分析によれば、教科書・副教材費は0円～66,427円と学校間格差が大きく、また進路指導費・学年経費・高体連・高文連負担金等が全校で一律に課されています。

これらは教育活動に不可欠であり、本来は公費で負担されるべき性質の費用です。

よって、県独自の補助制度の創設または既存制度の拡充により、保護者の負担軽減を図ることを求めます。

３．PTA会費・後援会費等の徴収方法の透明化と任意性の担保

PTA、後援会、育励会等の会費が実質的に「入学時の一律徴収」となっており、任意加入の原則が形骸化している事例が見受けられます。保護者が選択できない状態は法的にも疑義があり、不信感を招きます。

県教育委員会として、

（１）徴収根拠・使途の透明化（２）任意加入の徹底（３）一律徴収の是正指導　　を推進されるよう要望します。

４．制服・体育着等の指定の是正、負担軽減の推進

制服は多くの学校で高額化しており、保護者を苦しめています。さらに女子は男子より平均約2万5千円高いという構造的なジェンダー不平等が存在しています。また、販売業者の固定化により価格競争が働かず、高止まりを招いている可能性も指摘されています。県教育委員会として、

（１）男女不平等の是正（２）複数業者競争方式の導入（３）中古制服リユース・バンクの県内全校での展開

（４）期間を定め、制服以外の服装での登校を認める方式の普及

などを進められるよう求めます。

５．学校間の費用格差（最大20万円超）の原因調査と是正

男子では最大20.6万円、女子では15.2万円の学校間差が確認され、教育機会の平等を大きく損なっています。

費用の高額化を招いている要因を分析し、県主導で改善指導を行うことを要望します。

６．費用項目の公開と説明責任の徹底

一部学校において、費用の内訳や使途に説明が十分でないケースが見られます。保護者が納得できるよう、すべての学校で費用項目の公開と使途説明の義務化を求めます。

目次

速報：22日に県・県教育委に高校入学時の負担軽減を求める要望書を提出します　p1
インタビューシリーズ72
　村上準一　氏　p2
活動日誌　p10

浮島丸事件の真相は未解明のままです。この問題の解明に、下北の教職員の方々が取り組んでこられました。村上さんに、この事件の内容と取り組みの現代的意義についてお話を伺いました。

日時：2025/9/21
聞き手：竹浪　純
竹浪協子

インタビューシリーズ72

村上準一氏インタビュー（浮島丸下北の会会長）
～浮島丸事件の解明と犠牲者の追悼を求めて～

浮島丸事件は、1945年8月24日に京都府舞鶴湾で発生した大規模な海難事故で、日本海軍特設輸送艦「浮島丸」が爆発・沈没し、多数の朝鮮人労働者や乗組員が犠牲となった事件です。公式には549人の死亡が確認されていますが、犠牲者数は数千人に上るとの証言もあり、原因についても真相は未解明のままです。この問題の解明に、下北の教職員の方々が取り組んでこられました。村上さんには、この事件の内容と取り組みの現代的意義についてお話を伺いました。

竹浪純：今日は浮島丸事件という、強制動員された朝鮮人労働者が、終戦後朝鮮半島に帰国する途上、乗っていた船が舞鶴港で爆沈するという事件について伺います。村上さんはこの事件をずっと記憶に留めて運動をされておられるわけですが、この浮島丸事件のことについて知らない方が多いと思うので、事件の内容から少しご説明いただいて、今の取り組みについてお話しください。

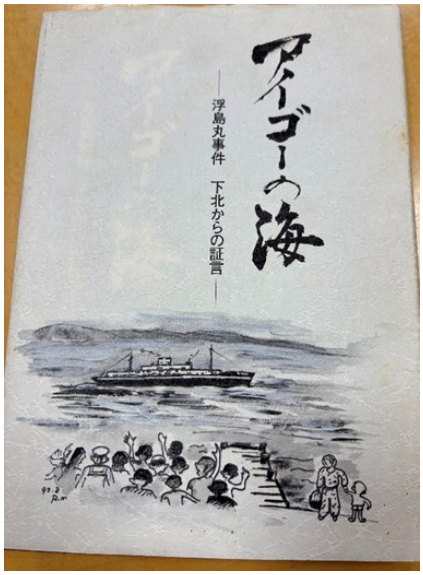
村上：私たち一般市民が、この地、下北に朝鮮の労働者がたくさんいたというのを知るようになったのが、戦後約50年も経ってからなんです。

純：そうなんですか。

村上：これを調べた方々が何人かいるんですけれども、一般市民が、4千人とも5千人とも1万人とも言われる朝鮮の家族、労働者がこの地にいたというのを知るのは、実際には47年も経ってからということになるんです。それを知ることになったきっかけは、この当時、1970年代ですが、この地で「下北の教育を考える大集会」というのが先生方と地域の方々が協力してやられていたんです。その第17回の大集会の際に、鳴海健太郎先生が、初めてこの集会の分科会の場で浮島丸事件について語ってくれたんです。この方が、一人であちこちを必死になって専門的に調べていた中心人物なんですね。

大集会は「民主教育を進める下北の会」が主催していたのです。主催者の中心人物は斉藤作治さんという方で、斉藤作治さんと鳴海健太郎さんは同じ大畑だったこともあって、分科会でこの話をすることになったのです。そうしたところ、様々な立場の方から、なんでこんなにたくさんの朝鮮人がここにいたのかとか、どうやって来たのかとか、そういう疑問・質問がその分科会の場でわんわんと出てきたんです。それで、もうこのままでは終わらせられないというので、どうするかということで話が進みました。で、これはやっぱり真実を知りたいということと、民主教育を進める下北の会の主催のポイントは、「地域に目を向け、下北に民主主義を育む」という、こういう立場で頑張っていたこともあって、出てきたそういう声をやっぱりまとめていこうということになり、まず証言集を作ってみようということになりました。証言集を作ることを通じて、どういうふうな人たちがいて、どういうことをやっていて、どういう生活をしていたのかを知る機会を作ろうということになったのです。

その結果、多分ご覧になったかと思うんですが、この「アイゴーの海」という証言集を作ることになったんです。



純：いや、読んだことないです。今初めて見ました。「アイゴーの海」ですか。

村上：この時の集会に集まって、証言集を作ろうということで作ったのがこれなんです。

純：そうですか。

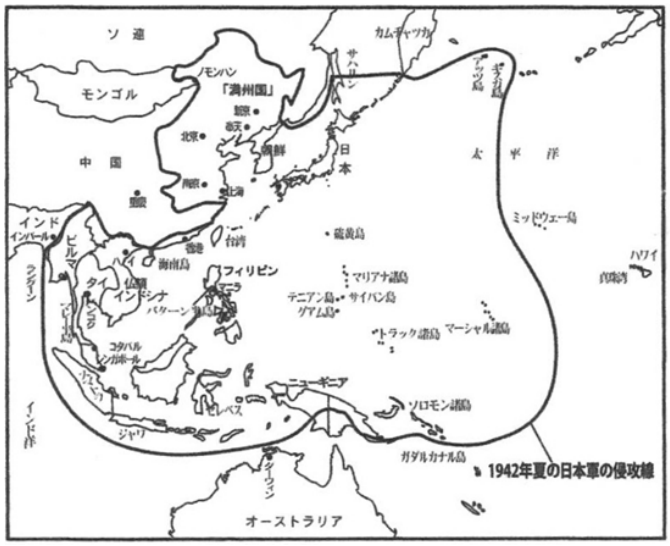
村上：この中で初めて、どういうところにどういう人たちがいたのかということとか、様々なことを知ることになるんです。もう一つ調べる中で気がつくことは、徹底した「しゃべるな、見るな、聞くな」、こういう声が圧倒していたんです。そういうこともあって、これを見ると、知っている人が隣の人に話をかけるとか、そういうふうなことが徹底して遮られた感じなんです。そのことも非常に重要なポイントではなかったのかということになります。そして証言集を作ろうということになった集会から、この冊子ができるまで、約1年間で作り上げてしまったんです。すごい力だったと思います。

純：すごい力ですね。

村上：ここの地域はもちろんそうだし、県内外のあちこち、そして全国を飛び歩く。中には韓国まで行って話

を聞くとか、そういうすごい行動力を伴ってこの冊子は作られているんです。で、さらに、やっぱりさっきの「しゃべるな、見るな、聞くな」というような徹底した隠ぺいに対して、せっかくこうやって冊子が作られて、どんどん真実が出てきたわけですよね。ですから、これら亡くなった方々の本当の追悼というのは、やっぱり真実を伝え続けていくことだろうということになって、じゃあこの証言集を作るだけでは終わらせないで、これを一つの運動体にしていこうということで、「浮島丸下北の会」の結成につながります。流れはそういう状況なんです。

この運動を進めていく中で、この下北の地がどういう地図上の位置づけになっているかということが非常に



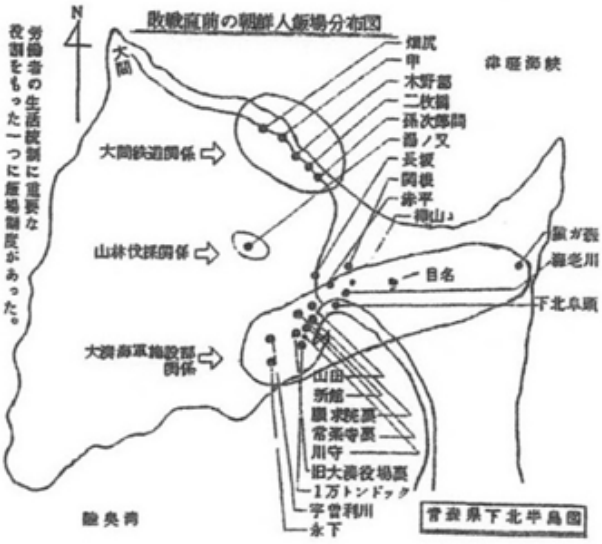
重要なことだとわかってきます。というのは、ここに軍隊があったために、こういうことが起こっているわけです。ご存知のように地図を見れば下北そのものは小さいし、箸にも棒にもかからないところなんですけども、実はこの下北っていうのが、日本の軍備にとってすごく重要な位置づけになっているんです。これは見にくい地図なんですけれども、日本が戦争を仕掛けたのは、この絵の中なんですが、この下北の地というのは、北海道と下北の間の津軽海峡、これがものすごく重要な意味を持っているのです。それは日本の大きな敵国というのは当時は中国でしたが、そのうち年々進むにしたがって中国からソ連に敵対関係が移ることになります。その時に今でもそうですけれども、戦争を進めるためには船がどうしても必要です。中国ソ連が日本海から太平洋に出るためには、この二つの海を結ぶここ津軽海峡を通るというのが一番理想的なんですよ。もしここを通らなければ北海道の北を回って来ないといけないし、あるいは南から九州を回って来ないといけない。そういうことを考えると、ここっていうのがものすごく重要な場所になります。

純：津軽海峡ですね。

村上：ここは公海なんです。どこの船が通ってもいい。だから、そのためにここを重要視して、大湊に軍港を作り、北方の中心港として軍隊を置くことになった。私たちは、この問題に取り組む中でそれを初めて知りました。さらには、ここに様々な軍隊が置かれるようになった。戦争の後半には本土決戦の問題が出てきます。1942年、ミッドウェイ海戦で日本は大きいダメージを受けて、それ以後敗戦に向かうことになるわけですよね。その時に本土決戦を想定し津軽海峡を重要視して、ここの守りを強固にするために、大間鉄道の建設が始まるわけです。

純：そうなんですか。

村上：そうです。そのためにここに飯場跡がありますけ



れども、この大間鉄道に沿ってここに朝鮮人の飯場が形成されるんです。もう一つこっちの方は釜臥山のふもとに、本土決戦のために3ヶ月間、外から燃料でも食料でも様々な生活に関わることを一切持ってこなくても決戦ができるようにするために、ここに様々な隧道掘りをやったわけです。物を入れるため、食料にしても戦争するための油にしても弾薬にしても、そういうものを3ヶ月分ここにため込むための穴掘りをしたのです。

純：そうなんですか。

村上：そのために朝鮮人の部落がここに集中するわけです。ここに集まった朝鮮の人たちのもう一つの危険な作業は、ここは軍港ですので、ここに1万トン乾ドックを作ろうとした。要するに船を入れて水を抜いて船を整備・修理するドック、1万トンの乾ドックを作る。その工事でこの人たちが働いた。そうとう高い所に塀を渡したりして、下を見ればもう危なくて、という風なそういう状況だったみたいです。中にはやっぱり落ちて亡くなった方々も随分いたということは、後で話を聞くことになるんですけど、そういう風な位置に朝鮮人部落という名前で呼ばれているものがあちこちにあったのです。

純：そうですか。

村上：この図は、個人がいるというのではなくて、一つの集団を作ってこういう場所にいたという、そういう地

図です。こういう地図を鳴海先生をはじめ、最初にやられた方々がこうやって調べて残してくれているのです。

純：そうなんですね。

村上：あとは、ご存知のように大間鉄道建設にあたっては、暴力を振るうとか様々なことが行われているわけですが、もう一つ、私たちがこれを調べる中で、やっぱりあの植民地支配とか差別政策の問題が明らかになります。何でそんなことまでしたのかというようなことなども出てくるわけです。例えば皆さんご存知のように、名前を日本名に変えられるとか。それから言葉を変えられるわけです。朝鮮語とかも使えず日本語を使うように指導されるでしょうし、こうした部落に住んでいる方々を「ヨボヨボ」とか「チャンコロ」とかそう呼ぶ。

純：ヨボヨボというのは?

村上：朝鮮人のことをヨボヨボと呼んでいたそうです。

純：そうですか。

村上：そういう半分バカにしたような下に見る立場に置く。つまり植民地化の影響がそういうことにつながっているのではないかと思うのです。

純：全然知らなかったです。青森県にいる人はやっぱりきちんと知らなきゃいけないですね。

村上：私たち下北の会が発足した頃には、この地域でも劇団で浮島丸の問題を捉えて演劇化したことなどがあったのです。それに小学生たちも参加しているんですよね。小学生が参加するということは、小学生の親ごさんは比較的若いですよね。そういう方々もこれに興味を持って参加したり、あるいは協力するわけです。そうすれば、学校でもそういう話が出てきます。当時、この問題が出てきた時には、私たちの先輩たちが学校に行って浮島丸の話をするということは珍しくなかったのです。

純：そうですか。

村上：今はほとんどそういうこともなくなっています。だから、そういう面で、この運動の広がりの歴史を興味をもってまとめてみたのです。先ほど話した劇団ですが、下北に「未来半島」という劇団があったのです。今でも少し根っこは残っていますが、そこで「七軒番屋の人々」という演劇を作って下北の各地で取り組みました。これによって、多くの小学生が参加したり、その影響で関係者が学校に行って浮島丸の話をすることは珍しくなかったんです。あと、それからこの運動が出てきてから、浮島丸事件について初めて、岩波書店の年表「近代日本総合年表」にこのことが載ることになったのです。私たちの運動が直接響いたとかそこまでは考えていませんが、私たちの運動がやられてからそういう掲載がされました。あと、ドキュメンタリー番組としてNHKが「“爆沈”浮島丸」というドキュメンタリーを作ったり、RAB青森放送が「恨の海」という番組を制作し、報道されています。

それからもう一つ大きいのは「エイジアン・ブルー浮島丸サコン」という、京都に都ができてから1200年を記念した映画が作られたのです。これも下北でロケをずっとやって、大間から下がってきた赤石海岸というところにタコ部屋を作って約1ヶ月間映画の撮影をやることになります。これには若い人たち、青森県内からもそうですけれども、この地域の高校生たちも学校を休んで撮影に行くという形で映画に参加しました。

純：エキストラですか。

村上：このエイジアンブルーの主題歌「チョンハー（清河）への道」を歌ったのが新井栄一さんで、独特の歌い方で歌うんですけど、その新井栄一さんの奥様が横浜町の出身だというのが分かってわざわざ来てくれて、私たちを激励してくれました。これはすごく嬉しかったです。

あとは、立正佼成会が、当時、戦争することに反対する立場を主張し切れなかったということで、立正佼成会舞鶴支部が戦後それの反省のもとに浮島丸事件を「みかん山のはまさん」という絵本にするという取り組みなども出てきました。

純：そうですか。

村上：そして、実際この立正佼成会の方々が、戦後現場を訪れるという意味でここに訪ねてきてくれると、そういうことなども起こってきています。

純：絵本はできたんですか?

村上：絵本はできて、私たちも見せてもらいました。舞鶴は直接の船が沈没したところですから、立正佼成会舞鶴支部で今でもたぶん聞けるのではないかと思います。

純：むつ市の図書館にはないのでしょうかね。

村上：どうですかね。あっても表だっては出しておかないと思うんですよ。こういう本はずっとしまっていて、言えばやっと探してくれるような状況です。

純：そうですか。こういうものこそ図書館ですぐ見られるようになればいいのですけどね。

協子：この問題の発端が、下北の教育の会が主催した学習会の分科会で話が出てきたというあたりについてもう少しご存知ですか。その集会には村上さんは参加されていたのですか。

村上：ええ。

協子：そうなんですね。

村上：私たちもまだ現職でしたので、聴きに歩くとかそういう風なことはできなくて、これをどう広げるかとかそういう風なところを中心にして私たちはやっていました。

斉藤作治さんや鳴海健太郎さんとかは現職から離れた時でしたので、本当に彼らあの大先輩たちはもう自分のお金で、どこからもお金はでませんので、自分のお金で調査をしていました。特に鳴海健太郎さんは車もなくて、どこかへ動くといえば、バス、列車これ一本なんです。それでも海外まで出かけるとかしたのです。

協子：そのことが報告されたのは、歴史教育の一環みたいなことがテーマの分科会でですか。父兄の中に朝鮮の方がいたとか。

村上：平和に関する分科会があったんです。個人的な研究はそういうふうなところで連絡を取り合ってやってきたと思います。そういう風にやってきたこと自体も私たちはほとんど知らなかったのです。多分、斉藤作治さんは鳴海さんの行動をちゃんと把握していて、中身も分かっていって、それで登場させたのではないかと私たちは思っています。

純：今のお話で、初め日本軍が本土決戦のために朝鮮人や中国人の人たちを下北半島に集めて、いろいろな作業を強制的に行わせたという、そのことは今お話しを伺ったんですが、そのことと浮島丸事件とのつながりをもう少し詳しく教えてください。

村上：浮島丸が大湊と関係を持つようになったのは、浮島丸はもともと大阪商船の貨客船、お客と貨物を運ぶ船で、主に大阪方面から沖縄とか南方方面との間で動いていた船だそうです。ところが、戦争が賑やかになって船があちこちから徴用されるようになり、それで大湊に配船されることになった。ちょうど1945年の終戦の時期に浮島丸は青森港から函館港に船員を載せて行く途中だったそうです。元々は大湊に配属された船で、青森だとかそういうふうなところへの動きもやっていたようです。1945年8月15日に終戦を迎えるんですけれども、その8月15日の時には函館港に入るちょっと手前まで移動中だったそうです。しかし大湊に籍がありますので、終戦の声を聞いてすぐここに帰ってくるわけです。そして8月19日に、もうここにいる朝鮮の人たちを返す、そういう命令が下るのです。

純：ずいぶん早いですね。

村上：それも一つすごく大事な問題になるのです。で、その朝鮮の人たちを返す船の名前が浮島丸です。浮島丸に乗せて返す。もちろん朝鮮に返すってことなんですが、そのために19日に出港命令が出されるわけですが、20日にはもう乗船が始まるんです。そして、いろいろとあったみたいです。あったっていうのは、乗組員が行きたくないと拒否するとか、あるいはこれはまともには帰れそうもないので乗りたくないとか、そういういざこざがあって、それでもかなり強引に乗船させられて22日の夜10時には出港する。こういう日程が組まれてしまったんです。

純：強制的にですか。

村上：さっき紹介したNHKが作った「爆沈」というドキュメンタリーの映像の中に、その時大湊の最高責任者だった艦長さんが出てくるのですが、艦長さんはそういう命令を一切私は知らない、と徹底的にこだわるんです。誰が命令を出したのか、責任を取ったのかというのは一切まだ分かってないのです。

純：そうですか。

村上：だからそれも重大な問題で、まだ解決していないのです。

純：責任問題が未解決なんですね。

村上：そういうふうなことで、浮島丸と朝鮮人の方々の出会いというのはその時初めてでした。乗船して初めて浮島丸だというのが分かった。浮島丸はここからはほとんど事件らしいものはなくて、舞鶴まで行って爆破されるんです。8月15日に終戦でほっとして、大湊に浮島丸が帰ってきて、ほっとする間もなく出港命令が出るわけです。びっくりするわけです。20日には乗船が始まりました。浮島丸に乗船した朝鮮の人たちというのは、下北にいた人たちだけではないんですよね。北海道から来た方がいたり、この近辺でも三沢あたりから来たとか、結構遠くから来ているのです。どういう連絡体制で出航のことを知って、どうやって来たのかというのも、まだ何も分かってないんですよ。少しずつ、そういうことを問題としてまとめて、何とか乗り越えていかないといけないと感じています。

純：今現在調査中なんですか。

村上：やらなければならないことはいっぱいあります。生存者から話を聞くというのが一番いいと思っているのです。ここを出て母国に帰る時に大湊小学校の5年生だった人がいるのです。その人に来てもらってここで話を聞くという取り組みも計画がされたのですが、何しろ当時5年生でも、時が経って70歳、80歳になって体調も良くなくて、残念ながらそれは中止に終わりました。ただ、直接来てはもらってはいないんですが、向こうに着いてからの生活だとか、こっちでの生活だとか、様々なことを勉強させてもらうことが多かったです。

純：浮島丸の生存者って、船を沈められたけれども助かった人ということですか。

村上：そうです。しかしこれも、今では戦争責任みたいなことが重要視して語られるようになっていますけれども、浮島丸が事件を起こしてすぐ次の日にでも新聞に載ったかと言えば、決してそうじゃないんですよ。これも私たちは、問題点の一つとして掲げているのです。8月24日に爆破沈没するわけです。なぜ沈没したかというのはまだ原因は不明ですが、それよりも24日に爆破沈没して次の日にそれが新聞に載ったかというとそうじゃないのです。日本の新聞に浮島丸事件が載ったのは6週間も後なんです。

純：6週間！

村上：8月24日に沈没させられて・・・

純：じゃあ新聞に載ったのは10月ですか。

村上：生き残った人、浮島丸での生存者が釜山に引き上げていくのが9月18日なんですよ。約3週間も経って。

純：3週間、はい。

村上：で、その生存者が朝鮮に行って釜山に着いて、浮島丸事件を新聞社に伝えるんです。

純：自分の乗っていた船が沈んだと。

村上：それで初めて朝鮮でも分かって、新聞社ですから、すぐ釜山日報は、「陰謀か？過失か？帰国同胞船爆沈」、これを9月18日に新聞に載せるんです。それを知った当時そこにいた日本兵2000人が、10月7日に舞鶴に帰ってくるわけです。それでその日本兵が初めて伝えるわけです。韓国でこういう事件が新聞に載った。日本でこういう事件があったって。で、それを知った舞鶴の鎮守府が初めて10月7日に、「蝕雷により浮島丸が爆破沈没、若干の犠牲者が出た模様」とその事件を発表するんです。若干どころじゃないですよね。洞爺丸事件に次ぐ第2の船事件ですから。

純：何人が亡くなったんですか。

村上：こういう6週間おいての事実を曲げた発表は何だったのか、いかにもこれを隠し通そうとした面影があるのではないかという憶測がされるのですよね。

純：浮島丸に乗った人数と亡くなった人数ってどういう数字ですか。

村上：それもはっきりはわからないんです。

純：わからないんですか！？

村上：政府はあくまでも乗った人数を発表はしているけれども、実際はそれよりもまだまだ多いだろうと、みんなそういう憶測をしているのです。乗った時の人数もそうだし、亡くなった時の数も政府発表は本当なのかという疑いの目は今でも抜けてないのです。

純：その発表した人数というのはどういう数字なんですか。

村上：発表したのは、亡くなった人の数が549人。その内訳は朝鮮人524人、日本人25人と発表しているんです。ただそれが本当の数なのかどうか、どうやって調べたものなのかははっきりしていないのです。

純：亡くなった人が549人だと。そういう発表だと。乗った人は何人かというのも、それは公式に数が出ているのですか?

村上：これも必ず政府発表っていう風なことで乗るんですけど…

純：一応その政府発表というのを教えてもらえますか。だいたいのイメージが全然つかないのです。どんな感じの事故だったのかということ自体がよくわからないのです。

村上：乗船者数が3735人。これは朝鮮の人です。で、亡くなったのが524人。日本人の乗組員が250人。で25人が亡くなっている。だから計549人が亡くなったと政府は発表しているんです。でも、この浮島丸の引き上げ作業は、沈んだままの状態で全部引き上げるまでに9年ほどかかってるんです。その引き上げの条件が何だったかといえば、決して中の亡くなった人を弔うためじゃなくて、スクラップとして売るために引き上げているんです。

純：そうなんですか。それはひどくないですか。

村上：そうです。だからそれを知った舞鶴の方々は、ちゃんと亡くなった方の骨を収集して、それから引き上げるべきだと政府とやりあって、やっと遺骨収集が行われるという、そういう状態だったのです。

もう一つ私たちが重要視しているのは、これは沈んだ後の方の話であって、沈む前の方の話として、8月15日に敗戦になって1週間後の22日に船が出るという状況。これはなぜそうなのかということです。これを非常に重要視して私たちの先輩たちもやってきました。というのは、日本各地に100万とも言われる朝鮮からの労働者たちは秋田にもいたし、北海道もいっぱいいたんです。そういう方々が朝鮮へ帰還するのはほとんどが9月に入ってからなんです。なぜ大湊だけが1週間後なのかということで、随分、私たちも勉強させてもらいました。

その一つがソ連軍の動きなんです。と言いますのは、大本営が本土決戦の作戦を決定するのが1945年の1月なんです。その後にヤルタ会談が開かれます。このヤルタ会談が開かれて何が決まるかというと、ソ連軍のこの戦争への参戦です。それが2月に決定されている。しかしこのソ連軍の参戦は、日本では誰も知らないんです。このヤルタ会談に参加していたのは米国と英国の首相だけで、ソ連はこの2つの国に対して参戦を伝えるわけです。日本は知らないのです。

純：まあそうでしょうね。

村上：で、ソ連は何をやったかといえば、8月8日に日本に対して宣戦布告をするんです。で、さっきの地図で言えば、ここまでが日本の領土だったんですよ。占守（シュムシュ）ってのは、どこか分かりますか。

純：シュムシュ？分かりません。

村上：カムチャッカのすぐ下あたりに占守（シュムシュ）島っていうのがあるんです。ここにソ連が8月18日に攻撃を仕掛けるんです。日本列島に対してですね。敗戦が15日ですが、その敗戦の日を過ぎた18日に日本に対する攻撃を仕掛けるんです。18日にここ

にです。ここからだんだん攻撃が南へと下がっていくんです。その結果、日本人がこの六島から引き上げる作業が始まりました。

純：そうですね。

村上：8月22日には、ソ連軍の潜水艦が北海道増毛沖でカラフトからの引き揚げ3船を攻撃するんです。

この22日が浮島丸の出港の日に相当するんです。8月22日のソ連軍の攻撃が、日本の浮島丸の出港を早めた一つの要因ではないかと私たちは考えています。8月22日だけじゃなくて、この前後に引き揚げ船に対する攻撃が行われているんです。だからそれへの対応ではないか、というのが一つの私たちの案として持っているものです。

純：なるほど考え方としてね。

村上：でも、実際は日本政府は何も認めていないんです。この1週間早めたことについての理由も認めていないし、同胞が亡くなったから賠償しろと朝鮮の方々は裁判も起こしているわけですけど、日本政府はそれに関わったりはしていないと責任を放棄しているのです。

純：裁判はまだ続いているんですか。

村上：最高裁が訴えを棄却して終わっています。

純：そうなんですね。

村上：だから、浮島丸で亡くなったことに対しても日本政府としては関係ない、指示したりもないと言うのです。ただ、一昨年あたりから私たちは舞鶴と東京と下北が協力して、政府に対して早く遺骨を返還せよという動きを進めているところです。

純：遺骨返還の動きというのは？

村上：まだ、この事件でなくなった遺骨が280体、東京のお寺さんに残っているのです。

純：そうなんですか。

村上：今まで政府は、亡くなった方の名簿がないと言って返還の意思を全く示してなかったんです。しかし去年、名簿があることが分かって、それを基にして今韓国と連絡を取りあってるところなんです。返すための準備を早めろと言うことを私たちは政府に対して要請していて、ついこの間、2回目の要請をしてきたところです。しかし、はっきりといつ返すとはまだ言ってないんですが、少し早まるのではないかと思っています。

純：なるほど。

村上：戦争の後に残されたものはたくさんあります。遺骨の返還であるとか、今さかんに新聞などでも取りざたされている空襲被害者の救済。日本各地で空襲が行われて、ものすごい打撃を与えられたわけですが、80年経っても空襲被害者には何も救済が行われていないわけですよね。軍人さんに対してはちゃんとお金を出しているわけですが、そういう救済を求める運動はまだこれから先続いていきます。

それから、被爆者や被爆二世への援護などもまだやられていないですよね。また、ここはあまり不発弾の処理というのはないんですが、沖縄などでは何百年かかるか分からないような不発弾の処理の問題も残っています。実際、生活に影響が出てきてるようなところもあるみたいです。戦後80年経っているのですが、そういう残されている課題はいっぱいあって、だから今でも、浮島丸事件っていうのは忘れられないのです。

私たちは、今、この問題を教育現場の方で伝えていく作業をなんとか取り戻したいということで、弘大の小瑶先生という教育学部の先生がむつの社会科の先生方と協力共同して、今年2月に、浮島丸の話や教育現場の話など交流する場を作ったんです。そういう場が今作られてきています。

あと、10月にこの地で北海道東北の退職した先生方の交流会があるんです。その交流会に西舘さんという方がいらっしゃいます。この方は、かなり前から齋藤作治さんなどと連絡を取り合って下北調査というのをずっとやってきています。そして彼が10月9日に「元教師は私たちに何を語り、何を見せたのか！」というテー

'25 全退教 北海道・東北ブロック交流集会

講演講師 にしたて たかし 西舘 崇 氏

元教師は私たちに何を語り、何を見せたのか！
～「下北調査」(2012～2024)を振り返りながら～

期 日 '25年10月9日(木)
時 間 16：30 ～ 17：50
会 場 プラザホテルむつ
入 場 無料です。 (下北町2-46)

お問合せ 青森県退職教職員協議会 むつ・下北支部
支部長 村上 準一 ☎ 080-1674-2087

後援 むつ市教育委員会

西舘 崇さん 東京大学国際協力学専攻博士課程終了後、外務省等で研究業務に携わる一方、農民食家北地方への現地調査を行う。2012年9月より民主教育研究所の一員として「下北調査」活動に関わる。2017年にその成果として「下北半島の未来を拓ぐ ―地域、教育、民主主義― 」を発表する。2016年4月より前橋国際大学に着任し現在に至る。専門分野は国際協力学。弘前大学教育学部客員研究員として地域の諸課題に取り組む。

マで講演やることになったんですよ。この「元教師」っていうのは、斉藤作治さんをはじめとする、これまで調査を担っている人たちで、このお話しをぜひ現場の先生にも聞いていただきたいと思っています。社会科の先生ばかりじゃなく、他の先生方にも知らせたいのですが、今なかなかこのチラシが学校に入らないんです。以前だと学校に持って行って、これお願いしますと言ってバーっとまいたんですけど、今はとってもそういうことはできないんですよ。

純：そうですか。

村上：でも今、田名部高校の社会科の先生にお願いして広めてもらう作業をやっています。

純：そうなんですか。

村上：新聞社にも持って行って宣伝してもらってきました。どこまで取り上げてくれるか。

純：そうですか。

話は元に戻りますが、この朝鮮の方々が暮らしていた場所の地図がありましたが、こういう場所がわかる看板や遺構などはあるんですか?

村上：跡はないのです。でも、その方々が住んでいた町内は今でもあります。もちろん住んでおられる方々は年齢もかなり若い世代になってしまっていますので、おじいちゃんかおばあちゃんがそこの出身だった方かどうかはわからないのですが、そういう部落の一つが田名部高校の前のあたりにもありました。一つ下がったところに道路がありますけども、そこの一角がそういう場だというのは前から聞いていました。

純：そうなんですか。

村上：大間鉄道の方は、今は車が通る広い道路になっていますが、昔の道路はみんな細く、その道路の両脇に民家があって、民家の近くに朝鮮人の家や飯場とかがあったと、話を聞きに行った時によくしゃべっていました。実際に叩かれたり殴られたりしている声が聞こえてきたそうです。

今でも、特に最近は新聞社の方がよく案内を願い出てくるので案内するのですが、比較的若い方にも声をかければ、「おじいちゃんから聞いたよ」とか、そういう話はよく聞いていました。

純：そうですか。

村上：特にこの大間鉄道の場合は、一番危険な作業というのはトンネル掘りなんですよね。今みたいに機械でどんどんやるわけじゃなくて、もっことつるはしでトンネルを掘るわけですから。

海外から来る方々も、皆さん様々な日本の声を聞いて行ってみたいと言います。おじいちゃんが飛行場で働いていたので、そこに行って現場に立ちたいっていうんです。ただ現場といってもここに何かがあるわけじゃあ

祖父の働いた場所に行きたいと碑の前に立つ韓国からの青年（2020年1月）

りません。で、碑を建てようということで、なんとかむつ市の協力を得て碑を作ったんです。

純：碑があるんですか。

村上：残念ながら風で倒れてしまいました。公民館の跡に立っていたのですが、なにしろ木で建てたもので、強風で折れてしまったのです。なんとかこれを復活しないといけないなと思っています。

純：じゃあ、この浮島丸事件の前の朝鮮人労働者のいろんな悲惨な状況を次の世代に伝える手がかりというか、実際に現場に立ってこういうことがあったんだなと振り返ることができる場所というのは今のところはないんですか。

村上：ないわけじゃないです。

純：あるんですか。

村上：飛行場があります。樺山の飛行場ってご存知ですか。

純：よく知らないです。

村上：今は飛行場ではなくて通信基地になっています。この樺山の飛行場がまずあります。あと、大間鉄道の跡にはトンネルの跡はいっぱいあります。

純：ありますね。

村上：ただ、今トンネルは、中に子どもが入って遊ばないようにという理由で全部塞がれてしまっています。どの裏山にも必ずトンネルがあるんです。

純：そうなんですね。樺山の飛行場は、一般の人が外からは見に行ける場所ですか。

村上：飛行場のすぐ脇を道路が通っています。中間貯蔵施設の隣なんですよ。近くが海ですから、あそこに飛行場を作って、来た飛行機を攻撃しようとしたわけです。

純：なるほど。

村上：大湊の自衛隊も今、地方隊ではなくて佐世保

飛行隊に組み込まれますのでね。いずれは米艦の来航もあるのではないかと、そういう心配をしています。弾薬庫の問題もありますしね。今、大湊にある通信基地は、全部米軍が最初に作ったものです。

純：そうなんですか。

村上：そうですよ。最初にここに無線基地を作ったのは米軍なんです。先ほどの樺山飛行場も今、無線基地になっています。ここも米軍が作ったものです。先ほどの津軽海峡を通る船を監視する役割を持っている施設が東通村にあるんですが、ここも米軍が作って、今は全部ここから米本土に情報が行くようになってしまっています。

純：そうですか。

村上：釜臥山ですが、あそこは国定公園で、国定公園には建物を建ててはいけないという条件があるみたいですけど、あのレーダーは建物ではないんだそうです。

純：ひどいですね。

村上：あのレーダーがなかった頃は、結構あの辺りは野草だとか自然の植物だとか動物だとかの調査研究が随分盛んだったところです。でも今は人が入れなくなってしまっています。

純：最後に、これから浮島丸下北の会が進めたいと考えていることについて、少しまとめてお話しください。

村上：去年、今年と県内外からの集まる方々の年代が若くなっています。それからさまざまな外の状況も伝えられるようになってきています。なので、やっぱりもう少し次の世代に伝えることを重視したいですね。また、碑だとか、ここがそうだよというのが分かるようなものを残す作業を、私だけじゃなくて、次の世代の方々と協力共同してやっていく作業に入りたいと思っています。幸い、先ほど話しましたように、先生方が子供たちに伝えていく、自分のところにしまっておくんじゃなくて、次の世代に伝える作業というのをこれまでもやってきていますので、ぜひここにはこういうことがあったんだよというのを、子どもたちに伝えられるような仕組みができていくようにしたいですね。

純：アイゴーというのはどういう意味なんですか？

村上：ハングル語で「悲しみの」という意味です。

純：そうですか、「悲しみの海」ですね。

純・協子：ありがとうございました。

活動日誌

11月25日（火）会報114号発行
11月27日（木）事務局会議（仁平、今、高松、竹浪協、竹浪純）
12月14日（日）第3回例会（仁平、髙松、小野田、竹浪協、竹浪純）
12月18日（木）会報115号発行

事務局より

・12月14日に行われた第3回例会の場で、11月定例会一般質問を新聞記事で読み、感想を出し合いました。資料はA3用紙に地方紙3紙の記事をコピーしたものが7枚。記事が多くなったのは議会定数等検討委員会の結論が出て、次回県議選挙の区割が決定されたことで、その記事が増えたためでした。1枚につき5分間目を通す時間を持ち、その後、自分の感じたことを述べる、という作業です。今回は5人でその作業を行い（途中から4人）ましたが、全部検討を終えるまでに1時間40分かかりました。これはさすがに疲れました。もう少しやり方を工夫し、せいぜい1時間程度で意見を出し合うようにしたいものだと思います。いずれチラシにまとめますので、乞うご期待です。
・例会では高等学校入学1年目にかかる費用についての分析結果と県への要望書を確認。記者会見を開くとともに、要望書を提出する予定です。
・12月初旬に、皆さんに会費の納入とカンパのお願いをしたところ、次々とご協力いただいております。これまでお寄せいただいたカンパは、20名から98000円となりました。ほんとにありがとうございます。引き続きよろしくお願いします。

お知らせ

●2025年度第4回例会のお知らせ
2026年2月15日（日）14時～16時
会場：アウガ5階 ワーク室2にて
●2025年度の会費を集めております。未納の方は、右記の口座への振り込みをよろしくお願いします。

当会ホームページQRコード　当会新FacebookQRコード

・青森県政を考える会の年会費は3000円です。会費の振り込みは下記の口座にお願いします。

青森県政を考える会ゆうちょ銀行口座

記号18450　番号10277881

口座名　青森県政を考える会

・会費振り込みにゆうちょ銀行振替口座の払込用紙を使えます。払込口座の記号・番号・加入者名は下記のとおりです。ご利用ください。

記号02220-4　番号121663

加入者名　青森県政を考える会

・事務局メール　aomorikensei@gmail.com